

子どもたちのこと 五

T子のなわとび事件

(五歳児)

大橋利恵子

ある日、給食を食べ終わってみんなで戸外に遊びに行こうと靴をはきかえていて、となりのクラスの先生が、

「T子さんがなわとびをゴミ焼き場にすてちゃったと子どもが言っているけど……」と話をしに来てくれた。びっくりした私は周囲の子とゴミ焼き場に行ってみると、本当に2本のなわとびの焼け残りがある。それを手にして、となりのクラスの言い出した子に話を聞きに行くと、確かにT子が投げ入れたのを見たと言う。そればかりか、悲しいことにクラスの友だち数名が確かに入れるのを見ていたと言うではないか、とにかく本人に聞いてみるのが第一と思つてT子の所に行き、「このなわとびがゴミの

中に一緒にあったのだけど知っている？」と声をかけると、すぐくあたりまえのように「うん」と言う。教師だけがことの重大さにうるたえてオロオロしていて、本人もそれを見ているがらとめようとはしなかったクラスメートたちはあっけらかんとしている。これはだめだと感じた私は、とにかくT子をつれて二人だけで話ができる部屋に行った。

「どうして、こんなことをしたの？」

こういう時についつい口にしてしまう言葉だが、この質問の意味のなさに気づくだけの余裕もなく、私はその言葉をT子にくり返していた。

かたづけの時間にT子は園庭のゴミ拾いの当番だった。バケツをもって歩いていくと、年少組のなわとびが2本落ちていたので、焼却場に入れた。というのがT子の話であり、ゴミとゴミでない物との区別がつかなかったのか、どうしてそんなことをしようと思ったのか等々、何もわからない。周囲の子のことも気になるので、とりあえず、T子を園長先生に事情を話してあずけると、保育室にもどった。そして、T子がなわとびを入れるのを見ていたと言った子たちに話を聞いた。

「友だちが池の中に入ろうとしていたり、誰かよその人の物を持っていきこうとしたらしたら、だめだよってとめてあげなくてはいけないし、もし大変なことが起きたらいそいで先生にお話をしてくれることになっていたじゃない。誰かケガをした時だっていつもみんな大いそぎで知らせてくれるでしょう。」

そんなような話をする内に、その子たちの中でT子に対する友だちという気持ちがあ
ごく薄く、友だちとして受け入れられていないのではないかと気づかされ、すごく不安
になった。

T子はふだんよくままごと遊びをする。砂を使ったり、草を使ったり、室内でスカ
ーフやふる敷を使ったりして、工夫しながら遊んでいる。また、じゅず玉のネットレ
スを作った時など、他のどの子よりも手早く、数多く仕上げていた。しかし、一方
は何かと注意されることの多い子で、くつが放り出してあったり、話をきかずにおし
ゃべりをしていたり、ならぶと前の子にいたずらしたりして、集団生活のルールを守
れなかったり、自分の身のまわりのことがきちんとできなかつたりする。何より困
るのは、トイレが近くすぐにもれてしまう。それでもそのパンツをはきかえずに少しぬ
れたままで平気であることである。その為にそばにいくと臭いがあると書いていやが
られてしまうのである。

T子は4才児クラスまで両親が別居し、母親と姉と暮らしていた。母親は精神的に
不安定でT子に対し充分教育的であったとは言えない。4才児クラスの終わりころ、兩
親の離婚が成立し、T子は父親とその祖父母の家に姉と共にひきとられた。やさしい
おばあちゃんやで現在の環境はそれなりに充分だと思われるが、T子の心のすみに母親
への思いが残っているのもまた事実のようである。

そんなことから、T子の生活習慣の自立は遅れても仕方がない状態ではあった。し

かし教師としては、そのままでは決して思えない。必然的にことが多くなり、T子は悪い子というイメージを周囲の子に与えてしまったようである。私は、T子の行動をだまっていた子たちに「T子ちゃんだって友だちなのだから、もっと一生懸命とめてあげなくては」と言いながら、その言葉が宙を舞っているのを感じていた。

何とだめな教師だろう。T子のことをどうしてちゃんと見つめられなかったのだろう。このことを言う前にもっと親切に手を貸してあげればよかった。T子がなわとびを投げこんだのは、周囲の子たちへの反発なのか。母親へのもやもやなのか。それとも理性のないいたずらなのか。とうとう私にはわからないままT子は卒園していつてしまった。「一年生になったらがんばるのよ。」と言ったら真剣な顔でコックリうなずいたT子。良き友だちを得て、すこやかに伸びてくれることを心から願っている。

